

尻別川の未来を考える オビラメの会

OBIRAME RESTORATION GROUP
NEWSLETTER Sep. 2018

- p1 坂田潤一「釣り人ができるイトウ保護」
- p3 パネル討論「どう守る？ 尻別川のイトウ」
- p7 赤ちゃんオビラメすくすく育ちざかり
市民向けエコツアー&スライドショー報告
- p8 新しいパンフレットが完成しました

Illustration : Fujiwara Hiroaki

49

坂田潤一 Presents

釣り人ができるイトウ保護

自分は小さいころから釣りが好きで、気がつくと40年以上楽しんでいます。釣り、アウトドア雑誌の編集者としては、若いころに、いま「伝説のアウトドア雑誌」と語り草になっている『Rise』の制作に関わり、『北海道のつり』編集部を経て、現在は『釣道楽』発行人をしています。この間ずっと「北海道内の釣り」を見てきたわけですが、今日はその経験にもとづいて、それもイトウ釣りに焦点を絞ってお話したいと思います。

北海道でルアーフィッシングが普及し始めるのは昭和40年代半ば、ちょうど草島清作・オビラメの会会長（1929年生まれ）が釣り名人と呼ばれ出したころでしょうか。当然のようにイトウはルアーフィッシングの最高のターゲッ

トと見なされました。そして必然的に、巨大なイトウが生息する尻別川に注目が集まりだし、昭和50年代半ばには、尻別川は大物イトウ釣り場として非常に有名になりました。以来、ここ尻別川は、ルアー・フライ愛好者にとって長らく憧れの川であり続けています。

イトウの自然分布域を調べると、昭和30年代までは本州の青森県・岩手県あたりまで生息記録がありましたが、やがて本州個体群は絶滅してしまいます。北海道内の生息河川も昭和50年代までに急減し、北海道南西部のイトウは消滅して、今では尻別川が生息南限になってしまいました。開発にともなう生息環境の悪化が主因と言われていますが、釣り場がどんどん減っていく中、わずかに残ったポイントでの釣りのプレッシャーも相当だったと思います。でも、釣り人たちが熱狂するのも無理はありません。イトウはとにかく大きい。大型個体の眼球は人間の眼球とほとんど同じサイズです。生態や習性が神秘的で、春の繁殖期を迎えると、雄イトウは体のエラから下半身が真っ赤な婚姻色に染まります。10年以上の寿命を持ち、全長1m、体重20kgを超えてくるって……すごいですよね。そんな魚が目の前を泳いでいるのを目の当たりにしたら、「こんなのが川にいていいのだろうか」と思ってしまうほどです。

尻別川のイトウも1990年代には絶滅寸前までいきましたが、96年に草島会長たち地元のイトウ釣り師のみな



さかた・じゅんいち
季刊「釣道楽」発行人
オビラメの会幹事

さんが中心になってオビラメの会の活動が始まり、再導入や繁殖地の保護などの苦労が実って、ここ数年、やっと回復の兆しが見えてきたところです。

じゃあ、また好きなように釣っても心配なくなったかという、産卵河川に遡上してくる親魚や産卵床の数からみて、まだそこまではいっていないでしょう。ぎりぎり個体群が維持されている現状の尻別川で、何も考えずに釣りをしてしまったら、マイナスの影響を与えかねません。

対象魚の乱獲防止を理由に「自由な釣りを規制・管理すべきではないか？」という議論は、昔から繰り返されてきています。川釣りに限っても、たとえば昭和40年代のオホーツク地区では、「ルアーフィッシング禁止」が新聞や雑誌で何度も取り沙汰されていました。トリプルフックと引っ掛け針を同一視して、ルアーが違法漁具扱いされかけたのです。現在からすると笑い話ですが、まあ確かに、ルアーを引っ掛け針の代わりに使ってる人は見かけます。

その一方で1990年代には、水産資源保護法で禁じられている河川でのサケ釣りを、「釣獲調査」なる名目で「解禁」させた例があります。これは現在も忠類川（標津町）などで行なわれていますね。また、主に放流ニジマスを対象に川にキャッチ＆リリース区間を設定して、釣った魚の再放流を促す自主ルールを設ける自治体が現れ、この形態は全国各地に広がりました。それらの多くは「町おこし」が主目的のようです。そうでなければ「釣りのルール化」をうまく進めることができない側面がある、ということです。

NO KILL OBIRAME!

それで自分がこれから話すのは、シンプルに「尻別川のイトウを守るために釣り人は何ができるか」ということです。釣りをしながらでも、イトウという魚をちゃんと守っていただけることを釣り人として証明したい。そして、尻別川の釣り人たちに呼びかけたい提案はズバリ「NO KILL」、この一言に尽きます。

尻別川で自由にイトウ釣りを楽しんでもらっていいんです。ルアーやフライフィッシング限定区間とか尾数制限とか、いくら細かいルールを決めても、守られなくては無意味ですから。それにあまり規制ばかりでは釣りがつまらなく感じますし。なので、ただ、『イトウが釣れたら殺さないでください。死なせないでください。』ということなんです。それは、いかにその魚を大切にすることなんです。

釣り場に立った瞬間から最後にリリースするまで、相手にダメージを極力与えないようにする。魚のサイズに対して華奢すぎるタックルは、ランディングまでに時間がか



ゲストの身の安全を第一に、魚のことも最大限に考えて行動する。本物のプロフェッショナルなガイドは厳しくて優しい。

りすぎて、ファイト中にイトウが死んでしまったり、リリースしても死んじゃったという例を数度見えています。

それからフック。ヘビータックルでも、フックだけではできるだけ小型で、ゲイプの狭いシングルフックを選んでください。ファイト中にバレル確率は高まりますが、太く大きく深いフックよりも魚に与えるダメージは小さくなります。とにかく一番言いたいのが「NO KILL」。殺さない、死なせないようにしよう、ということです。

釣った魚を大切に扱うという点では、北米の優れたフィッシングガイドがお手本になると思います（上の写真）。優れたガイドは魚をものすごく大切にします。自分の取材経験では、魚が少しでも出血していたら直ちにリリースさせられますし、記念撮影のために魚を水中から上げるなら3秒以内、と厳しく言われました。中にはそれが出来ないゲストもいて、代わりにガイドが魚を保持して写真に納まっていた。あちらでは、こうしたガイドたちが釣り人を監視し、また魚の正しい取り扱い方を教育する役目を担っている気がします。

釣りの楽しみ方は、釣り人の数以上に存在します。スタイルを使い分け、技術をみがくもよし、道具にこだわるもよし。でもやっぱり、魚がいなければ釣りは成立しないわけ。主役は釣り人でもないし、釣り具でもない。魚なんです。そこに気づいてほしい。

尻別川にイトウがたくさん泳ぎ回っている状態になれば、「NO KILL」の戒めは緩和された状態で楽しめると思います。「オビラメ復活30年計画」がこのままうまく成功して、2030年までにそのような状態になっていれば、自分たちは笑顔でオビラメの会を解散できると思います。そのために釣り人ができること。それはイトウを殺さない、イトウを死なせない釣りを楽しむということです。

オビラメ勉強会「釣り人ができるイトウ保護」(2017年10月28日、倶知安風土館)での講演から。記録・大串伸吾

どう守る？ 尻別川のイトウ

オビラメの会は6月3日、倶知安町文化・福祉センターで報告会「ぼくら、尻別イトウのレスキュー隊」を倶知安町と共催し、パネルディスカッションでは、8シーズン連続でイトウ自然繁殖地完全保護を達成した「見まもり隊」のメンバーたちが成果を語り合いました。(敬称略)

パネリスト	川村洋司	オビラメの会事務局長
	藤原弘昭	オビラメの会理事
	足立 聡	水中写真家、オビラメの会幹事
	大石剛司	オビラメの会理事、見まもり隊リーダー
司会	平田剛士	フリーランス記者、オビラメの会幹事

司会 この広大な尻別川流域で、いまイトウの自然繁殖が確認されているのはたった2カ所しかなく、そのいずれもが倶知安町に存在しています。パネリスト席にお座りの4人は、いずれも倶知安町民ではない方たちですが、流域の外からこの尻別川のこと、あるいは尻別川のイトウのことを、どのような思いで見られるのでしょうか。

藤原 私は札幌に住んでいます。出身は道北地方の天塩川流域です。中学生だった昭和50年ごろ、イトウ釣りに興味を持ち始めた時から、尻別川は憧れの川でした。当時、釣り雑誌に「尻別川で1m20cmのイトウが釣れた」といった記事がよく載っていて、「大人になったら尻別川に釣りに行って、でっかいイトウを釣ってやる」と夢を膨らませていました。実際に大人になってみると「尻別川のイトウはもう絶滅したんじゃないか」と言われる状況になっていました。あるきっかけでオビラメの会のイトウ保護活動に飛び込みましたが、私にとっての尻別川は依然として憧れの的でした。昔と同じ姿に戻るかどうかは分かりませんが、またイトウ釣りが楽しめる状況になればと願っています。倶知安・ニセコ地域は外国人観光客も多く、もしイトウという釣りの対象魚が増えたら、さらにいろんなお客さんを呼べるようになると思います。そうした意味でも、地域に貢献してくれる川だと思います。

足立 普段はフリーカメラマンとして魚類の生態写真を撮っています。イトウは特に好きな魚で、猿払川・釧路川・朱鞠内湖・天塩川などあちこちで撮影しています。イトウの産卵時期は早春ですが、産卵場所はだいたい山奥で、クマがふつうにいるような場所をしばらく歩いて、ようやくたどりつけるようなところばかりです。この尻別川の場合は例外で、国道に車を停めて降りたらすぐにイトウの産卵行動を観察できる状態です。その魚が120cmと道内でも

最大級。私はこれまで200～300個体のイトウを撮影していますが、1mクラスならいざしらず、120cmクラスは尻別川以外では見たことがありません。しかも尻別川のイトウは、個体差もあるでしょうが、非常に太いスタイルをしています。おそらく遺伝的な形質じゃないかと思います。倶知安町のみなさんは、タイミングさえ合えば、車から降りて3歩も歩けば1m20cmのイトウをすぐ見ること

またイトウ釣りが楽しめる尻別川になれば (藤原弘昭)

ができます。繁殖場所の詳しい情報を宣伝し過ぎると、いろんな人、心ない人も集まってくる可能性がないとは言えないので、オビラメの会は河川名の公表を控えているのですが、倶知安町民のみなさんにはぜひ一度見に来ていただきたいと思います。

大石 地元に住んでいる人は、かえって地元の素晴らしさにはなかなか気づけないものかも知れません。私が住んでいる横浜市は自然が非常に少ない町です。倶知安のように、近くにこんなきれいな山や川があって、その川にこんなに大きなイトウが泳いでいるというのは、非常にうらやましいと思います。私は2013年にニセコの尻別川に釣りに来ました。45cmのニジマスが釣れたんですが、横浜の近場だったら25cmの魚でも大物です。それに比べたら、ここはすごく大きな魚が釣れます。たまたまその年、オビラメの会のイトウ保護活動のことがヤフーニュースに流れていて、ニセコで事務局長(当時)の吉岡さんに会いに行って、「来年から見まもり隊に参加します」と約束しました。そうやって今年5年目になりました。この大きな魚を絶やすことなく次世代に伝えていきたいと思っています。身体が動く限り、毎年こちらに来て見まもり活動が続けていきたいと思っています。

司会 オビラメの会には倶知安町在住の会員の方もおられます。井手さん、コメントをいただけますか。

フロア（井手道雄） 倶知安町にイトウがいることで、何か心が豊かになる気がしています。（奥山に）ヒグマがいるとかシマフクロウがいるとか聞くと、直接的に関わり合いがなくても、その存在によって心が豊かになることがあると思います。それと同じように「尻別川にイトウがいる」という事実は、イトウのことをよく知らないという人にとっても、心を豊かにしてくれる、そういう存在だと思います。これから新幹線が開通すれば今以上に本州や外国からの旅行者が増えると思います。倶知安は雪がすばらしい、ジャガイモがすばらしい、羊蹄の湧き水がすばらしい。さらに「ここにイトウがいる」というだけですごい宣伝効果があると思うし、たとえ釣りに興味があっても、「あそこにこんなすごい魚がいるんだよ」というだけで、価値があります。いま尻別川のイトウ繁殖地が倶知安にだけ残されているのは偶然に偶然が重なった結果です。50年後100年後を考えて、これを大事にしていくべきだと思います。

川村 見まもり活動で8年間、1mを越すイトウたちの遡上をきっちと守ることができました。われわれも見まもり活動をしながら楽しい思いを味わうことができましたし、よかったなあと思っています。ただ、これを未来永劫続けるのは不可能です。いずれかの段階で「あえて見まもり活動をしなくてもイトウ繁殖地が維持される」という体制を作っていかなければなりません。当会の「オビラメ復活30年計画」（2001～2030年）も残り10年あまりとなりました。当会はイトウ繁殖地を尻別川流域全体に増やしていこうとしていますが、それらの場所でも同じように、あえて保護活動をしなくても環境を維持できる体制を作る必要があります。そのためには、地元の方にも、イトウが地元にとって非常に大切な存在だということを認識していただいて、「住民意志」みたいなもので繁殖環境を維持する体制づくりを進めていかなければならないと思います。とはいえ、これはかなり大変なことです。住民のみなさんの多くは、自然の中でいろんな仕事をされています。たとえば、場合によっては、イトウ繁殖地の保護を優先して農業活動に影響のあるようなこともあえてしなければならないことも起こるかも知れません。それをどうやって乗り越えていくか。いろんな話をしながら進めていくしかなく、

そういう機会を増やして、意思疎通をしていきたいと考えています。

司会 見まもり活動の間、現地に見学に来られる人たちの雰囲気や、イトウに対するまなざしを、どんなふうにお感じになりましたか。

大石 私が接した範囲では、釣り人以外は、温かい目で見守ってくれていたと思います。私が滞在中、2組の釣り人が来られました。川にイトウが来ていることを知らない様子で、「せっかく来たんだから」と言って

釣り人たちにもっと情報発信をしていきたい（大石剛司）

実際に竿を出していった人もいました。でも大半の釣り人は、「イトウが産卵しているので釣りは控えてください」と説明すると、「じゃあ別の川に行きます」と理解してくれます。釣り人に対して、イトウが来ていることをもう少し情報発信していきたいと思っています。

司会 イトウ釣りが好きな人の中では近年、「繁殖期に繁殖場所では釣らないようにしよう」というモラルが広まってきたのではないのでしょうか。

藤原 生息河川によって差はありますが、イトウの産卵期はだいたい4月から5月中旬にかけてです。イトウ狙いの釣り人の中では最近、「繁殖期の釣りは控えよう」という暗黙のルールが浸透しつつあるようです。イトウ釣り場として有名な猿払川（猿払村）にそのように呼びかける看板が立ち、地元グループが熱心に啓発してきたので、その効果だと思います。ただ、イトウ繁殖期はちょうどゴールデンウィークと重なりますので、産卵遡上の大型イトウを狙う釣り人を何度か見たことはあります。でも非常に少ないと思います。

司会 みなさんのお手元に、南富良野町イトウ保護条例（抜粋）を資料としてお配りしています。会場に南富良野町からお越しの浪坂さんがおられます。概要をお話しいただけるでしょうか。

フロア（浪坂洋一） 浪坂です。南富良野町から来ました。オビラメの会の会員でもあります。南富良野は石狩川水系空知川の源流部に位置する町です。金山人造湖（かなやま湖）から上流域にイトウが生息しており、金山ダムから上流には遡上障害となる人工物がいないため、産卵に適した環



2018年シーズンの見まもり隊活動を振り返るパネリストたち。右から藤原弘昭さん、足立聡さん、大石剛司さん、川村洋司さん。左端は司会の平田剛士・オビラメの会幹事。撮影・坂田潤一。

境が残っています。いま前方に座っておられる川村さんを中心に道立水産孵化場（現・道立総合研究機構）によるイトウ調査が昭和 50 年代から続けられてきた場所で、その蓄積が野生イトウの生態解明につながったと思います。南富良野町は平成 6 年（1994 年）、全国で初めてイトウを対象とする区画漁業権をかなやま湖に設定しました。当時は、産卵期の大型イトウを狙って釣りに来る人が多数いました。「なるべく釣らないで」とお願いしても……。産卵期のオスは目立つし、意外に簡単に釣れてしまいます。そのせいで明らかに親魚数・産卵床数が減少してきたので、平成 11 年（1999 年）、北海道内水面漁場管理委員会に「繁殖河川を含むエリア内での 5 月 1 日～31 日のイトウ採捕禁止」という指示を出してもらいました。10 年継続した結果、産卵期のイトウ狙いの釣り人はほとんどいなくなり、産卵床は増えてきました。とはいえ、委員会指示が解除されたら、途端にまた釣り人が急増するかもしれません。そこで委員会指示が解除されるのを機に平成 21 年（2009 年）、新たに町条例を設けることにしたのです。以来 10 年、産卵期のイトウ釣りはほとんどなくなりました。モニタリング調査の結果を見ると、産卵床数は、自然災害などの影響で数字が低い年もありますが、おおむね増加傾向にあります。漁場管理委員会の指示に強制力（違反者への罰則）があったのに比べ、町条例では「釣り禁止」と打ち出すことはできません。あくまで「釣り自粛のお願い」なんですね。その点はちょっと弱いかもしれませんが、たとえばオビラメの会が見まもり活動で、イトウ繁殖河川に釣りに来た人に「釣らないでください」とお

願いする時、こうした条例があればずいぶんやりやすくなると思います。南富良野のこの条例を参考に、倶知安町でもイトウ保護管理条例を作ることは可能だと思います。

川村 倶知安町内のイトウ繁殖河川は 2 カ所しかなく、このうち 1 カ所のイトウ再生産区間は合わせて 500m くらいの範囲に限られています。（1 水系全体をすっぽりカバーする南富良野町イトウ保護管理条例と）同じような条例をここで設けるのは難しいかな、とも思います。でも逆に考えると、この非常に狭い区間さえ保護できれば目的を果たせるので、条例制定に対する釣り人側からの抵抗は少ない

見まもり活動しなくても繁殖地を維持できるように（川村洋司）

と思います。先ほども触れましたが、倶知安町の繁殖河川は周囲が全部農地です。農業活動とイトウ条例がうまくかみ合うかどうか……。そういった問題を解決できれば、条例化によって「産卵期にこの区間ではイトウを捕らないで」と言うことはできますし、有効な手段だと思います。

フロア 初めてオビラメの会の集まりに参加しました。倶知安生まれ、倶知安育ちで、生家は倶知安のイトウ再導入河川から 100m くらい離れたところにありました。「この川には昔はサケが遡上してきていた」と父が話していました。私はイワナ釣りをしました。きれいな川です。以前、

旧知の草島会長から「あなたの実家のすぐそばにイトウを放流したから釣らないようにしてくれ」と話を聞いていましたが、その時の放流イトウ

たちが大きくなって産卵に戻ってきていると聞いて、きょう参加してみようと思いました。両親は、私が生まれてすぐのころ、私の生家から町の方へ引っ越したのですが、それはクマがたびたび出没する地域だったからだそうです。そういう思い出のあるところでイトウが繁殖を再開していることが、とても喜ばしく、うれしいことだと思っています。ぜひとも応援させていただきたいと思います。

川村 本当にうれしいお言葉をいただきました。とにかく地元の方にどんどん活動に参加してもらって、応援してもらえたら、非常に力になります。ぜひみなさん、一人でも多くの方が賛同して、バックアップしていただければと心から願います。ありがとうございます。

フロア（井手） イトウ釣りのマナーって、法律では決まっていらないんですが、暗黙の了解というのがあると思います。たいがいの釣り人はリリースするのを前提に、シングルフックを使っているようです。ただリリースの仕方にはまだ問題があると思っています。魚体を水面から持ち上げず、できるだけ生存率を高めるとか……。そういうリリースマナーをいろんな機会に発信して、釣り人の間に定着させていけば、この会が活動を終えた時にもイトウを残せるのではないかと思います。それからもう一ついいですか？ 再導入河川の倶登山川でイトウの自然繁殖が再開したのは、途中にある5基の落差工に魚道がついたことが大きかったと思います。横断工作物のせいでイトウ繁殖が途絶えてしまった支流は他にも多いわけですが、行政に対策の動きはあるんでしょうか。

藤原 天塩川のことを少し調べたことがあります。天塩川水系ではいま、国交省が下川町のサンル川にダムを建設していますが、それに合わせて北海道開発局が天塩川の支流を全部調査して、落差工の位置と魚類遡上の可否をチェックしています。サンルダムを造る代わりに、といっているんですが、サクラマス資源を減らさない、あるいは増やすために、サクラマスの遡上を妨げている落差工を対象に、国交省が魚道整備を進めていて、この10年ほどで、けっこう魚道が増えてきました。ただチェック漏れもあるようで、天塩川水系で僕が毎年見ているイトウ繁殖河川の落差工は未改修です。きっかけはどうあれ、地域の人が要望し

イトウの産卵河川にぜひ来てください。 私が案内いたします（足立聡）

て初めて行政は動きます。きょう倶知安町役場の方が途中で退出されたのがちょっと残念なんですけど、この尻別川の流域の自治体の本気を出してほしいなあ、と願っています。会場にはNHKの記者さんもお見えですが、ぜひ自治体にハッパを掛けるような報道をしていただければありがたいと思います。

司会 そろそろお時間となりました。最後に一言ずつ願います。

大石 来年もまた、見まもり隊に参加します。みなさんと川でお会いできるのを楽しみにしております。

足立 大石さんみたいにびっちり現地にいられませんけど、私もちょくちょく来ています。声をかけてくだされば案内もいたします。ぜひ来年、産卵河川に来てください。

藤原 今日はどうもありがとうございました。今後ともできる限りがんばっていきたいと思います。みなさん、どうぞよろしくお願いします。

川村 今日は本当にみなさん、ありがとうございました。予想以上、といっちは申し訳ないんですけど、町内の小学校の運動会と重なってしまって、町民の方はほとんど参加いただけないんじゃないかと思っていたので、予想以上にたくさん来ていただいて、本当にありがとうございました。こういう機会をどんどん増やしながら、こちらからも情報発信をしていきたいと思っています。尻別川には非常に巨大なイトウがいて、これはもう誇るべき存在です。このことをぜひ他の方にも発信していただいて、イトウを未来永劫、残せるような状況をみなさんととともに作っていきたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いします。今日はどうもありがとうございました。

赤ちゃんオビラメすくすく育ちざかり



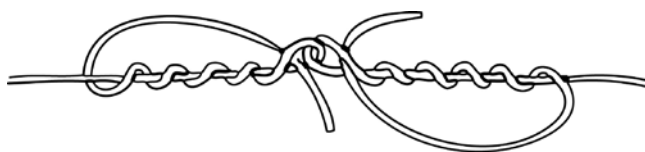
尻別川にわずかに残るイトウ自然繁殖河川で、今季生まれとみられるイトウ稚魚（0+）が元気に泳ぎだしている姿が確認されました（上の写真。7月30日、倶知安町内の尻別川支流で、足立聡さん撮影）。

一方、今年5月、有島ポンドのイトウ親魚たちから人工採卵・人工授精で誕生した稚魚が、「里子」先の道総研さけます・内水面水産試験場（恵庭市）の水槽で順調に育っています（下の写真。8月7日、平田剛士撮影）。今季の人工受精卵は計8417粒、1カ月後の生残率は約24%でした。やや低い結果となりましたが、生き残って7月に孵化した稚魚たちは餌もよく食べ、生育は順調です。



川村洋司事務局長の話

人工孵化のイトウ稚魚たちは、このまましばらく飼育を続けて、体長4～5cmになる10月ごろ、尻別川水系の支流数本に導入する計画です。放流後は稚魚たちは厳しい自然環境下で生き延びなければなりません、うまくいけば6～10年後、倶知安川に続く新しいイトウ自然繁殖地を創出できるものと期待しています。



有島ポンドで市民向け ツアー&スライドショー

イトウエサやり体験の様子はYouTube「オビラメの会チャンネル」でお楽しみいただけます。
動画撮影・大串伸吾（オビラメの会理事）、向井徹（北海道魚類映画社／オビラメの会）

オビラメの会のイトウ親魚飼育施設「有島ポンド」で8月4日午後、エコツアー & スライド上映「まぼろしの巨大魚イトウ」を、有島記念館と共催しました。ニセコ町や後志地域生物多样性協議会の後援。

尻別川の絶滅危惧種イトウについて地元のみなさんに興味を持ってもらうことが目的で、昨年に続いて2度目の開催です。

町内外から約30人が参加し、公園内のイトウ飼育施設「有島ポンド」でエサやりを体験。日本最大の淡水魚イトウがが激しい水音を立ててエサに食いつくと、一斉にどよめきが上がりました。

館内では水中写真家・足立聡さんによるスライドショーが開かれました。巨大なイトウを捉えた迫力満点の映像に、「尻別川にこんな魚がいるなんて」と驚く声が相次いでいました。

PRESENT CONDITIONS

尻別イトウは今

尻別川のイトウはとりわけ巨体を誇り、地元の先住民族の言葉アイヌ語に由来する「オビラメ」の愛称で呼ばれ、古くから多くの釣り客を魅了してきました。しかし、ダム建設や地行運搬など、主に昭和時代の河川改修にともなう自然環境の悪化によってイトウの生息地は急激に減少し、ついに絶滅の危機に瀕しています。尻別川のイトウは、1990年代後半の生息調査で「絶滅寸前」と判定されましたが、当会をはじめとする関係団体と関係機関の復元活動が功を奏し、現在の状況を脱しつつあります。

OUR MISSION

オビラメの会は「オビラメ復活30年計画」(2001-2030)の完成を目指して活動しています。

繁殖期上旬の完全保護

尻別川にわずかに残った自然繁殖地を守るために、毎年4月～5月の繁殖期に合わせて、現場で24時間の「見まもり隊活動」を行っています。

再生地帯の回復と人工増殖

尻別川自然環境が維持してきた重要な遺伝情報を守るため、ニセコ町有島公園内の「有島ボン」で尻別川産イトウの飼育と人工増殖を進めています。

生息地の回復と再導入

イトウがすみやすい環境を尻別川のあちこちに再生したうえで、人工増殖産魚を放流して、イトウ自然繁殖復活の呼び水にしようとしています。

MEETING WITH OBIIRAME

オビラメに会いに

尻別川でついにイトウを釣り上げたあなた。おめでとうございます！ そのイトウは尻別川のみならずあなたへのプレゼントに違いありません。記念写真を撮ったら、どうぞ天然のうもにリリースしてあげてください。あなたとの思い出をいっしょに思い出して、そのまま川を遡上りながら帰るのを手伝って、イトウが自力で泳ぎ出すまでそっと手を添えてください。そのためには、外しやすいうもにのフックを使うのが理想です。イトウは手を握ることで恐怖心を増やします。あなたに奪われたイトウが戻れば大成功です。尻別川のイトウたちの前途に明るい光が差し込みます。

釣うのはあなた

NO KILL OBIIRAME!

イトウ復元事業推進「有島ボン」を是非公開しています。神奈川産イトウたちを驚かせないよう、静かに観察しましょう。ボンではイトウ釣りはできません。

オビラメの会 会長／草島清作 副会長／宮岡隆雄 事務局／川村洋司
〒048-1511 北海道虻田郡ニセコ町ニセコ315-198 ☎090-8279-8605

②尻別川の未来を考えるオビラメの会 2018
イラスト／藤田弘樹 写真／山本浩二（水中撮影）、中田健士

新しいパンフレットが完成しました。
藤原弘昭さんのイラストレーション、足立聡さんの水中写真作品とともに、尻別イトウ＝オビラメの魅力や、オビラメの会のミッション・活動成果をご紹介します。

このパンフレットは、オビラメの会事務局や、ニセコ町役場前の蕎麦店「まぐろ屋十割」などで無料で配布しています。どうぞご利用ください。

「オビラメの会」は新入会を歓迎します

当会は、会費と寄付金などで運営される非営利の市民団体です。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。年会費は2000円です。郵便局の振り込み用紙に住所、氏名、電話番号を明記のうえ、「入会希望」と書き添えて、右のゆうちょ銀行口座にお振り込み下さい（手数料はご負担願います）。会員期間はお振り込みいただいた日から年度末（5月）までです。おおむねひと月以内にニュースレターをお届けします。

■年会費 2000 円
■ゆうちょ銀行
02720-9-11016
■加入者名「オビラメの会」

会員のみなさまへ

2018年度の年会費納付時期を迎えています。同封の振込用紙をご利用ください。

WANTED

標識オビラメ見つけたら
☎ 090-8279-8605
オビラメ事務局 マデ

ご支援をありがとうございます

当会は公益財団法人北海道新聞野生生物基金の2017・2018年度助成を受けています。また2016年度から、「1% for The Planet」運動に賛同する株式会社アトリエ・モリヒコの支援を受けています。当会の「絶滅危惧種イトウ（サケ科）北海道尻別川個体群の復元活動」は、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟による『プロジェクト未来遺産 2015』に登録されています。当会は2017年度、北海道知事から第1回「未来へつなぐ！北国のいきもの守りたい賞」を受賞しました。みなさまのご支援に深く御礼を申し上げます。

絶滅危惧種イトウ尻別川個体群復元に向けて、引き続きご協力いただきますよう、お願い申し上げます。

オビラメの会ニュースレター 第49号(2018年9月発行)

OBIRAME Newsletter No.49 September 2018

- 発行■ 尻別川の未来を考えるオビラメの会
会長／草島清作 事務局長／川村洋司
- 編集■ 平田剛士
- 印刷■ (株)須田製版(北海道滝川市栄町3-5-16)
- 口座■ ゆうちょ銀行 02720-9-11016 オビラメの会
- 事務局■ 北海道虻田郡ニセコ町ニセコ315-198(川村方)
〒048-1511 TEL 090-8279-8605
<http://obirame.sakura.ne.jp/index.html>
©2001-2018 Obirame Restoration Group

水と空気、みどりの大自然

ニセコが好きだ

楽しんだあとは川を語ろう

まぐろ屋十割

ニセコ町富士見 65 TEL/FAX 0136-44-2472

Email / itou110@sa2.gyao.ne.jp